

平成 27 年 6 月 28 日現在

機関番号：45405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23601030

研究課題名(和文) 乳幼児期における適応方略としての自己主張行動に関する研究

研究課題名(英文) Development of desirable self-assertive behavior in infants

研究代表者

岩城 美穂子(倉盛美穂子)(Iwaki - Kuramori, Mihoko)

鈴峯女子短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：90435355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：乳児期の自己主張は、身体的方略から言語的方略へ変化し、そうした背景には、言語能力、社会性といった発達的な要因が関係していると考えられているが、その変遷過程自体は明らかにされていない。本研究では、乳児期の子ども達の自己主張行動と言語発達、社会的行動発達、愛着行動との関連を明らかにするために、自己主張方略が身体的方略から言語的方略へシフトを促進させるメカニズムを検討した。その結果、養育者に愛着行動が示せることが、身体的方略から言語的方略への重要な要因であることが示された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to clarify the relationship between self-assertive behavior and the development of language, social behavior or attachment in infants. In this developmental stage, the strategy of self-assertive behavior changes verbal from non-verbal communication. It is indicated that the promoting factor of this change is what the infant well express their attachment behavior to the caregiver.

研究分野：発達心理学

キーワード：乳幼児 主張 言語 身体的 発達 愛着

1. 研究開始当初の背景

近年、乳児保育を実施する園が増加しており、保育現場では、低年齢の集団保育故に生じやすい問題に対応することが求められている。一緒に過ごす時間が長いと、子ども同士の関わりは増え、思いがぶつかりいざこざとなることも多い。

大人もしくは保育者がそばにいれば、子どもの表情や行動から子どもの意図を推察し、子どもが理解できるような言葉をかけ、調整的な役割を果たすが、自分の思いが芽生え、表現する発達時期である1歳児同士の場合には、互いの思いが異なると、相手を押ししたり、ひっかく、かみついたりといった身体的な方略を自己主張の方法としてとることが少なくない(高濱, 1995; 倉盛, 2009)。

1歳児から2歳児にかけて子どもの自己主張スキルは飛躍的に向上する(野澤, 2011)。例えば、自分の思いが通らなかつたときに相手の手や腕をかみついて自分の怒りを表現するかみつきの行動は、1歳児クラスでの発生頻度が高いが、1歳児クラスの発生ピークが過ぎれば、年齢とともにかみつきの行動は低下し、代わりに言語的方略が増加していく(倉盛, 2009)。乳児期の自己主張は、身体的方略から言語的方略へ変化し、そうした背景には、言語能力、社会性といった発達の要因が関係していると考えられているが(西川・射場, 2004)、その変遷過程自体は明らかにされていない。

また、かみつきの行動は、相手に与えるダメージが大きく、保護者を含めた大きなトラブルを招きかねない対処の難しい問題であり、愛着の問題や精神的不安定さから生じる行動を解釈されることも多い。自分の思いと他者の思いが葛藤する経験を通じて、乳幼児期は、他者との折り合いのつけ方やその場にふさわしい主張の方法を少しずつ身につけていく時期である(野澤, 2011, 2012; 平木, 2009; 石川, 2012)。

かみつきの行動は、未熟な自己主張表現の1つとして理解される一方、かみつきの行動=問題行動と捉えられることも多い。いかに未然に防ぐかに注意をはらうことに重点がおかれ、かみつきの行動が減少した背景や要因については着目されていない。身体的な方略から言語的な自己主張方略への発達は様々な要因が絡み合っているものと考えられるが、先行研究で指摘されているかみつきの行動の増減に關与する主要因に着目し、身体的方略から言語的方略への移行プロセスを考えると、低年齢児の自己主張行動の理解や対応方法、そして、言語的な主張方略への発達を促進する集団保育のあり方を提案できると思われる。

2. 研究の目的

乳児同士の葛藤場面における解決方略の内容及び頻度を検討することによって、かみつきの行動などの身体的方略が優勢な段階か

ら言語的な方略が優勢となる段階の変遷過程を検討する。また、かみつきの行動と言語能力、社会性といった発達の要因の関連が示唆されていること(西川・射場, 2004)、愛着が乳幼児期の子どもの社会化過程の重要な要因として認識されていること(Stams, Juffer & van IJzendoorne, 2002)から、主に言語発達、社会性、愛着と身体的方略及び言語的方略との関係を調べることにより、言語的方略へのシフトを促進させるメカニズムを検討する。

3. 研究の方法

対象者

1歳児クラス 34名 担当保育士 6名, 2歳児クラス 48名 担当保育士 9名

調査時期

2011年7月から8月と2012年2月から3月。以後、2011年7月から8月を前期、2012年2月から3月を後期として表記する。

手続き

保育園の1・2歳児クラスの担当保育士に調査時期期間中、1週間におこったいざこざ場面の記録をしてもらい、それを1週間ごとに提出してもらった。

加えて、各子どもの言語発達及び社会性発達を査定するために、KIDS(乳幼児発達スケール)の評定を保育士に依頼した。今回は、KIDSの「理解言語」「表出言語」「対子ども社会性/友達との協調行動」「対成人社会性/大人との関係」の4つの領域に限定した。保育者は担当の子どもについて、各質問項目内容の行動ができるか否かを回答した。保育者に対する子どもの愛着行動を測定するために、AQS日本語版(近藤・Verciketl, 1993)を、幼稚園や保育所の保育中で測定できるよう作成された「乳幼児用愛着評定尺度」(立元・西山・田爪, 2000)を使用した。保育者は、「保育者に対する信頼良好な関係」「保育者に対する依存性」「活動性・社会性」の3領域に5段階で回答した。

4. 研究成果

調査時期におけるいざこざ場面(場所や物の取り合い、互いの思いの相違、遊びから発展等)の総報告数は、1歳児クラス60件、2歳児クラス70件であった。1人平均1.71回、標準偏差は2.42、最小値は0回、最大値は17回だった。

いざこざ場面で生じる初発行動と後発行動

いざこざ場面において生じた初発行動を、逃避(されたままあきらめる、逃げる)、泣く、身体的行動(ひっかく、かみつく、おす、ける、たたく、物をとる)、言語的行動(大声をだす、「いや」「やめて」「○○の」などの言葉で表現する)の4つのカテゴリーに分類した。1歳前期、1歳後期、2歳前期、2歳後期の4つの時期ごとに、初発の自己主張行動の種類別生起頻度の差を検討したところ、1歳児前期後期は、身体的行動の

生起頻度が、逃避、泣く、言語的行動よりも多く、2歳児クラス前期後期は、身体的行動と言語的行動が、逃避や泣く方法よりも多いことがわかった(表1)

表1 初発行動における種類別生起頻度

	逃避	泣く	身体的行動	言語的行動	
1歳前期	2	0	27	8	p<.05
1歳後期	1	1	16	5	p<.05
2歳前期	2	3	19	20	p<.05
2歳後期	5	4	21	28	p<.05

次に、後発行動における種類別生起頻度の差を検討したところ、1歳児クラスでは、前期も後期も差はみられなかったが、2歳児クラス前期では、身体的行動と言語的行動が逃避や泣く行動よりも生起頻度が多く、2歳児クラス後期では、身体的行動が一番多く、次に、言語的行動 逃避、最後に泣く行動であった。

表2 後発行動における種類別生起頻度

	逃避	泣く	身体的行動	言語的行動	
1歳前期	11	6	12	7	ns
1歳後期	2	5	10	9	ns
2歳前期	5	3	18	18	p<.05
2歳後期	12	2	31	16	p<.05

上記結果から、初発行動においては、1歳児前期後期は身体的行動が多いが、2歳児クラス前期後期になると、身体的行動と言語的行動が多くなること、後発行動においては、1歳児前期後期の時期は、発生種類頻度に差はないが、2年生前期後期になると身体的行動と言語的行動が多くなることがわかった。このことから、いざこざ場面の行動は、1歳から2歳にかけて、身体的行動から身体的行動+言語的行動へシフトしていることが示唆された。

いざこざ場面の行動の複数利用について

いざこざ場面で生じる行動は、一人1つと

は限らないため、年齢時期ごとに、1つの行動のみをおこした場合と、2つ以上の行動をおこした場合の生起頻度に偏りがあるかを検討した。

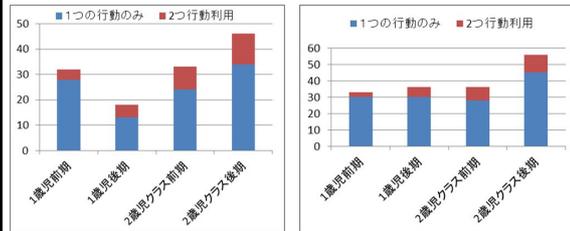


図1 初発行動

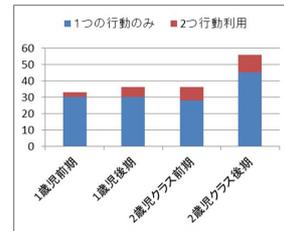


図2 後発行動

全年齢時期ともに、二項検定の結果、偏りは有意であり (p<.05)、1つの行動のみを使用することが多かった。つまり、1・2歳児クラスでのいざこざ場面での交渉パターンは、いくつかの行動を組み合わせるのではなく、1種類の行動でのみ表現されることがわかった。

いざこざ場面での主張行動と、言語発達・社会的発達・愛着行動との関連

先行研究(西川・射場, 2004)では、かみつき行動と言語能力、社会性といった発達の要因の関連が示唆されている。それらの関連を確かめるために、はじめに、いざこざ場面での自己主張行動頻度が多い高群と、少なかった低群を選出し、高低群の言語発達・社会的発達・愛着行動の傾向を調べることにした。自己主張数は1人平均1.71回、標準偏差は2.42であったことから、自己主張行動数4回以上を高群、0回を低群とする二群を抽出した結果、自己主張行動高群は21名、自己主張行動低群は62名となった。

自己主張行動群における、KIDS発達スケールの理解言語、表出言語、対大人社会性、対子ども社会性、愛着信頼、依存、活動性の発達月齢と、「乳幼児用愛着評価尺度」の愛着行動の評価結果を表3に示す。

表3 自己主張高低群の言語発達・社会発達・愛着行動

	KIDS 発達月齢差				愛着行動		
	理解言語	表出言語	対成人社会性	対子ども社会性	愛着信頼	依存	活動性
高群	5.7	-0.4	-0.6	-5.5	1.9	3.3	2.8
	(2.5)	(1.8)	(2.0)	(1.3)	(0.6)	(0.2)	(1.2)
低群	-2.2	-4.2	-6.3	-6.8	3.6	3.6	2.9
	(1.4)		(1.1)	(0.8)	(0.3)	(0.1)	(0.1)

高群の自己 KIDS 発達スケールは、各領域の得点に応じて発達年齢を算出できるように構成されているおり、対象児の実際の月齢と K I D S による発達月齢との発達月齢差を示すことにより発達査定を行う。発達月齢差が 0 である場合、年齢相応の発達をしていると判断する。自己主張行動高群の平均生活年齢は 35.2、自己主張行動低群は 34.2 で、両群に差はなかった。

自己主張行動高低群における、KIDS 発達スケールの理解言語、表出言語、対大人社会性、対子ども社会性における発達月齢に差があるかについて、グループ（高低）×発達月齢差得点（4）の分散分析を行った結果、有意差がみられ、自己主張高群は、自己主張低群より理解言語、表出言語の発達が進んでいることがわかった。自己主張高低群における愛着行動（愛着信頼・依存・活動性）の発生頻度の差を調べるために、グループ（高低）×愛着（3）の分散分析を行った結果、有意差がみられ、自己主張高群は、自己主張低群より保育者に対する信頼・良好な関係を示す行動が多いことがわかった。

上記結果から、自己主張数が多い子どもは、少ない供よりも、理解言語の発達が生活年齢より進み、表出言語の発達は平均で、保育者と子どもの信頼、良好な関係が低調であった。自己主張数が少ない子どもは、高い子どもよりも、理解言語の発達が生活年齢より遅く、表出言語の発達はさらに遅く、保育者と子どもの信頼、良好な関係であった。自己主張数の高低は、理解言語の発達、表出言語の発達、保育者と子どもの信頼、良好な関係が関係していることが示唆された。

身体的方略及び言語的方略の自己主張行動と、言語発達・社会的発達・愛着行動との関連

自己主張行動が多い子どもには、身体的方略が多い子どもと言語的方略が多い子どもがいることから、その違いが何に起因しているのかを明らかにするために、自己主張高群の子どもの身体的方略の自己主張行動及び言語的方略の自己主張行動を目的変数とし、説明変数として、KIDS の発達月齢差（理解言語・表出言語・対大人社会性・対子ども社会性）と愛着行動（信頼・依存・活動）をとりあげ、それぞれに重回帰分析を行った。その結果、有意な決定係数が得られた（ $p < 0.05$ ）。

表 4 身体的方略及び言語的方略と言語発達・社会的発達・愛着行動との関連

	身体的行動	言語的行動
理解言語		
表出言語		
対大人社会性		
対子ども社会性		

愛着信頼		0.41
依存	0.54	
活動性		0.64
決定係数（R ² ）	0.35	0.43
自由度調整済決定係数	0.30	0.34

身体的行動の多さは、保育者に対する依存性が高く、保育者に自分に関心をもってもらいたい気持ちが高さによって説明でき、言語的行動の多さは、保育者と離れて活動できることや、保育者に対する信頼性の高さによって、説明できることがわかった。

上記の結果をまとめると、1）乳児期の子どもたちがいざこざ場面に参加するようになる前提として、理解言語、表出言語がある程度発達していることと、保育者に対して従順に従う関係ではない関係性が築かれていることがあげられる。そして、2）1歳児クラスから2歳児クラスにかけて、身体的行動から、身体的行動プラス言語的行動へシフト段階で、保育者に自分に関心をもってもらいたい依存性が高いと、身体的方略での自己主張行動が多くなり、保育者と離れ自分のペースで活動できていると、言語的方略での自己主張行動が多くなることがわかった。身体的行動から言語的行動へのシフトを促進させるには、保育者との愛着関係が K E Y であることが示されたと言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

藤岡順子，倉盛美穂子 巡回相談が広汎性発達障害の疑いがある幼児の保育園入園直後の支援に及ぼす影響 臨床発達心理実践研究，2014，第 9 巻，71-19. 査読付

〔学会発表〕(計 3 件)

倉盛美穂子 保育園における乳幼児クラスの怪我の特徴について 2012，日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集，502.

倉盛美穂子・岩城達也 安全教育的視点で考える集団保育における環境と配慮 集団保育で生じる怪我の発生構造に着目して 2012，日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集，122.

倉盛美穂子 乳児期における適応方略としての自己主張行動に関する研究 2013，日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集，319.

〔図書〕(計 1 件)

倉盛美穂子 ナカニシヤ書店 浜崎隆司・村
隆宏・湯地宏樹編著 やさしく学ぶ保育の心
理学 ・ 感情の発達 45-55

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

岩城美穂子(倉盛美穂子)

(Iwaki - Kuramori Mihoko)

鈴峯女子短期大学 保育学科・教授

研究者番号：90435355